

ヨシでびわ湖を守る
ネットワーク通信

ヨシ原で出会った水鳥たち

7月「水郷めぐり」を社員で体験する機会がありました。のどかな水郷をめぐる、あちこちで水鳥が出迎えてくれました。カモ・ザギ・カイツブリ、意外にも人に慣れてしまっているのか、舟が近づいても悠々と私達をのぞき込むかのように泳いでおり、シャッターチャンスに恵まれました。あまりの警戒のなさに苦笑してしまうそんな風景です。ゆったりと流れる時間の中をヨシ原の風景とともに自然を体で感じる。そんな癒やしを与えてくれる体験でした。

びわ湖を知る ■ 問題

びわ湖の淡水真珠の養殖に使われる貝はどれでしょう。

- ①アコヤガイ
- ②イケチョウガイ
- ③カラスガイ
- ④ササノハガイ

特集 1ページ

滋賀県立琵琶湖博物館 専門学芸員 芳賀 裕樹 様 よい



沈水植物 その重要性と危険性

【沈水植物とは】

水辺や水中で生活する植物を総称して水生植物(水草)といい、その中で水底に根を張り、体全体が水中に没している一群を沈水植物といいます。

図1と図2は琵琶湖の代表的な在来の沈水植物の写真です。図1がマツモ。金魚鉢などに入れることが多いので、なじみのある方もいらっしゃるでしょう。図2は琵琶湖でおそらく最も量が多いセンニンモです。その姿は陸上の植物にそっくりで、水槽写真といわなければ水中の植物とは気付かないかもしれません。実際、沈水植物は、陸上植物が水中で生活するように進化したものだそうです。



図1. マツモ



図2. センニンモ

【全国で衰退する沈水植物】

日本中の多くの湖沼では沈水植物が減少し、場所によっては消滅の危機にあります。原因のひとつは富栄養化にともなう水中の光不足です。富栄養化が進むと植物プランクトンが増えて水が濁り、光が深いところまで届かなくなります。すると、沈水植物は浅いところにしか生えられなくなり、分布範囲が狭くなってしまいます。

もうひとつの原因が湖岸の改変です。埋め立てや護岸化によって岸より浅い所がなくなってしまうと、沈水植物が分布できる場所はいっそう狭まります。工事による水底の掘り返しや、濁水の発生も沈水植物を枯らしてしまいます。

【沈水植物の復活を目指す動き】

沈水植物は湖沼生態期の重要なメンバーですから、生物多様性の見地からもその消滅は避けなければなりません。同時に、沈水植物の群落には次の機能が期待できるので積極的に保全すべきとされています。

ひとつめは魚の産卵場・仔稚魚の生育の場としての機能です。コイやフナ、その他多くの魚が岸近くの沈水植物に卵を産み付けます。孵化した仔稚魚は沈水植物群落を隠れ場に使い、その表面付近にいる動物プランクトンなどを食べて育ちます。同じような機能はヨシ群落で有名ですが、沈水植物群落にもヨシ群落に匹敵する力があるのです。

もうひとつは植物プランクトンを減らし、透明度を上昇させる機能です。先に富栄養化が進むと植物プランクトンが増え、水の濁りによって沈水植物が衰退すると書きました。実は逆のことも可能で、先に沈水植物が増えれば水中の栄養(窒素・リン)を吸収してしまい植物プランクトンの増加を抑制します。

特集 2ページ

意図的に沈水植物を増やして湖沼の透明度を高める水質制御法は欧州で盛んに行われています。

いくつかの湖沼では沈水植物の復活を目指すさまざまな実験が行われています。なかなか大変なようですが、いつかは成功するかもしれません。

ところが、その先には、思いもよらぬ事態が待ち構えている可能性があります。その実例として琵琶湖南湖の現状を紹介しましょう。



図3. 琵琶湖の北湖と南湖

【沈水植物が増えすぎた琵琶湖】

南湖は琵琶湖の南側の細くなった部分で平均水深は4mです。琵琶湖の沿岸帯(水深10m以浅の水域)の面積の約半分を占め、沈水植物が最も多い水域です。沈水植物の分布範囲は1930年～1950年代には南湖の面積の約50%でしたが、富栄養化の進行や湖岸の改変によって1994年には9%まで縮小していました。ところが1994年以降、急に沈水植物が増えはじめ、現在ではほぼ全域に分布するようになりました。

沈水植物の増加に伴い、1994年に1.7mだった南湖の平均透明度は、2012年には2.7mまで上昇しました。ところが南湖がきれいになったと感じる人はあまりいません。図4のような光景が出現したからです。水はきれい(透明)だが湖はきれいじゃない・・・ なんと皮肉な状況になってしまいました。強風が吹けば切れた沈水植物が湖岸に漂着し、腐って悪臭を放ちます。水中は沈水植物のジャングルと化し(図5)、船の航行や漁業の妨げになっています(図6)。

魚の産卵場として沈水植物が役立っているかどうかは不明です。そもそも、魚が卵を産むのは岸辺なので、沖の沈水植物が役に立つとは思われません。沈水植物のジャングルのせいで魚が岸に近づけないと考えている人もいます。



図4. 大繁茂した沈水植物群落



図5. 水中の映像



図6. 二枚貝の調査で漁具に絡まった沈水植物

【沈水植物とどう付き合う？】

琵琶湖南湖の沈水植物は1990年代半ばから復活したわけですが、今では増え過ぎて、さまざまな弊害をもたらしています。1930年～1950年代の状態(南湖の半分に分布)で止まってくれたらよかったです・・・ 沈水植物が増えすぎた原因はわかっていませんが、ほどよく沈水植物が生えていた時代に比べて湖中の栄養が多すぎるのではないかと思います。増えすぎた沈水植物は何とかなければなりません。現在は滋賀県などの行政機関が沈水植物を刈り取り、堆肥にして市民に無料で配布しています。こうした活動は、沈水植物そのものを減らすとともに、湖中の栄養を取り除くことになります。

増えすぎた沈水植物は減らさなければなりません、やり過ぎでなくなっても困ります。沈水植物とどうやって付き合っていくといいか、試行錯誤が続きます。

ネットワーク 広場

(株)水郷のさと まるやま
小見山 康子 様より

風薫る手漕ぎ舟 水郷めぐり

福岡県柳川、茨城県潮来と並ぶ近江八幡の水郷ですが、昔と変わらない自然のままの水郷は近江八幡だけで、日本一と言われています。

平成18年1月に国の重要文化的景観第一号に選ばれ、平成20年10月ラムサール条約湿地として西の湖と長命寺川が登録。平成21年1月には「白王・円山」が日本の里100に選ばれる等、その貴重な水環境は国内外から高い関心を寄せられています。

水郷めぐりの魅力を言葉で伝えるのは正直難しいです。
小さな手漕ぎの田舟でゆったり、のんびり揺られながら、間近に広がる水郷のヨシ原の景色を体感する。
目で見て、耳で聞いて肌で感じる。五感で感じる癒やしのひとときです。
広がる景色は四季ごとに移ろい、自然の豊かさ、深さをうかがい見ることが出来ます。
その感覚は古き良き日本の里山を思い起こすようで、年配の方には懐かしく、若い方には新鮮に映り、外国の方には異国情緒を感じさせるものとして喜んでいただいているようです。



日本の原風景とも言われる自然の恵みをからだ全体で感じ、
ゆっくり流れる舟の旅を是非、体験にお越し下さい。



水郷のさと まるやま
近江八幡市円山町1467-3
TEL 0748-32-2333

<http://www.za.ztv.ne.jp/tekogi.maruyama/>

コクヨ工業滋賀では、環境研修の一環で「水郷めぐり」を社員が体験しました。

身近にありながら、ほとんどの社員が初めての体験でしたが、癒やしの空間に皆さん絶賛の声があがっていました。

是非皆さん、一度体験してみてください。間違いなく水郷の自然に癒やされることでしょう。

T・O



ネットワーク 活動

新企画 カヌーに乗ってヨシ原散策

ネットワークでは7月27日と8月17日の2回、夏の新企画として西の湖でカヌーと和船を体験しました。冬場、ヨシ刈りを行っている西の湖を湖面から散策し、夏のヨシ原のようすや生き物たちの気配を感じてもらう。そんな体験をすることで、ヨシ刈りボランティアの大切さを考える機会となればと思います。



【7/27日】あいにくの悪天でしたが、1時間ほど遅らせ初めてカヌーに挑戦しました。終わってみれば、悪天も良い思い出となりました。



【8/17日】風のないカヌーにとって最高の条件でした。パドルを漕ぐ手も軽やかに、湖面から見るヨシ原や時折顔を出すカイツブリに興味津々...



パドル操作でめいっぱい体を動かし、西の湖の風と自然を肌で感じる事が出来ました。皆さんから「予想以上に楽しかったです。」とのお便りをいただいております。

きっと身も心も癒やされる夏の思い出の体験となったことでしょう。

【お知らせ】

今年もコクヨ工業滋賀は「びわ湖環境ビジネスメッセ」に出展します。そこで、ネットワークやリエデン商品と出会い、「こんな活動を始めています。」「こんな商品を作りました。」などの事例を教えてください。（画像と100字程度のメッセージ）メッセで紹介させていただきます。皆さんの応募をお待ちしております！（太田まで）

びわ湖を知る ■ 解答

②イケチヨウガイ

現在はイケチヨウガイと中国産のヒレイケチヨウガイが使われているようです。

みんなの リエデン

和の彩り

麻とヨシのノート

日本の美しい彩りを
一糸一糸に込めた麻織物
自然のやわらかな白さの
琵琶湖のヨシ紙

麻とヨシのノート ～美しい和の彩り～

本体価格：550円(税抜き)

サイズ：A5(206×148mm)

罫線：7.5mm横罫線 / 無地

枚数：50枚

製本：無線綴じ

カラー：5色

好評発売中



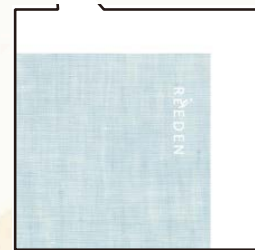
「滋賀らしさ」

ノートの表紙に彩りを添えるのは、琵琶湖と愛知川がもたらす湿潤な空気の中で、鎌倉時代から培われてきた「近江上布」を代表する、伝統的な近江の麻織物です。弊社と同じ町内で織られた地元のもんです！

中のノートは、もちろん琵琶湖・淀川水系のヨシを使ったヨシノート！

正に地元、滋賀の魅力を詰め込みました。

使い込むほどに天然繊維がもたらす「味」を実感していただけるこのノートは、ご自分用にも、大切な方への贈り物・お土産としても最適です。



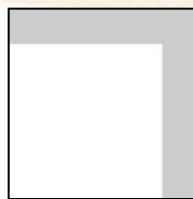
裏表紙右上に箔押し

■用途・お好みによって、カラーと罫内容をお選びいただけます

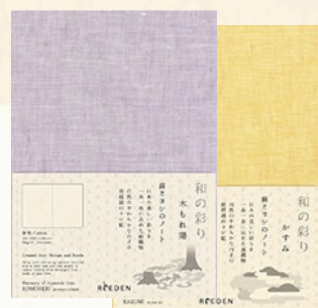
7.5mm横罫線



無地



さざなみ 芽吹き 花笑み



かすみ 木もれ陽

「お客様のお声から生まれました」

昨年、弊社の設立25周年を記念し「麻とヨシのノート」を限定発売しました。

今回装いを新たに発売した「麻とヨシのノート」は、展示会でのアンケート等でいただいたお客様の声にお応えし、表紙色と罫内容のバリエーションを増やしました。ReEDENは、皆様と地元へ寄り添ったもの作りを目指しています。これからも、よろしくお祈いします。
(ReEDENの住人より)